
先延ばしのラストバトル

勇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先延ばしのラストバトル

【Zマーク】

Z6650C

【作者名】

勇

【あらすじ】

王様に言われて魔王を倒すべく旅に出た勇者。さまざまな出会い、その他諸々をすっ飛ばしてとうとう魔王の居城へと着いたご一行。彼らを待ち受けていたものとは…? シリアスやラブなど王道RPGに少なからず含まれている要素など皆無に等しいグダグダ物語。

勇者お断り

ホントに突然だがここは俗に言つ魔界・・・そこにある魔王の城の前である。

ここまできた理由はお約束で申し訳ないんだが・・・。

命令だけしてたいした餞別もくれない爺さん・・・もとい精一杯の援助をしてくださった王様の命によつてここまできた。

そもそもって色々な戦い等々を経験して出会いや別れがあつたわけだ。

今では仲間もいる。

こっちにいる・・・って言つても文だからわかんないよな・・・。まあともかく眼鏡をかけた牧師さん風の格好した物腰が丁寧そうな灰色のお下げ男。名前はレイ・カーティス。まあ紹介ビドおり回復兼魔法係。ちなみにお約束どおりの腹黒。

「一気に紹介しましたね・・・。ところで誰が腹黒ですか?ルシオ君。」

そこでここから炎を出しながら質問してるあなたですよレイさん。

そもそもうー人。「」を持ったやたら露出が多い格好のよく怪我しねえよな的な赤いショートの姉ちゃんがアイリス・ライアット。最近のトレンドか?

「何の話をしてるの?」

いや、時代の変化なんだろうなあつて…。

ああ。そして俺は主役…なのかな?名前はルシオ・ヴァレンタイン。
まあ格好はそこのやうな昔ながらのRPGの勇者っぽいのだ。

「投げやりな紹介ですねルシオ君。」

だつて誰も興味ないだろそんなの…。ていうかなんで俺が司会進行
してるの?

「人手不足と作者の無能ですね。」

「仕方ないわよね…。」

なんちゅう世界や…。

「まあ何でこんな重要そうな場面で呑気にだべつてるのかの説明が
必要じゃない?」

「任せましたよルシオ君。」

「へーー…えーっと…数時間前に戻るわ。

「『』が…魔王のすむ城か…。」

鋭い目つきで城を見上げながらそう呟く。

「やはり壮大ですね…・・・禍々しさすら感じますよ…・・・。」

「この先に・・・あいつがいるのね…・・・。」

レイやアイリスもそう言いながら同じように城を見上げる。魔界に魔王の城。そのシチュエーションに相応しい赤く暗い空の色。そしてそれに相応しい雷鳴とか蝙蝠とかその他もうもろ…・・・。

え?なんか投げやりだ?まあその理由は後で分かるさ。

「行くぞ…!」

「ええ・・・…!」

「分かったわ…!」

気合も新たに城門を空けようと・・・したのが…・・・。

「何だこれ?」

「張り紙…・・・ですねえ…・・・。」

「勇者お断り?」

ええそりやもう。セールスお断りみたいなのがでかでかと…。それまでのやる気なんぞつか行っちゃいますよねえ…?そう思いません…?せん…?

「ま、まあとりあえず入りましょう。」

「え…ええ・・・そうね・・・。」

「よ、よーしーぐわー・・・。」

ぎこちない気合を入れたところどりあえず中に入る。口縛りしてなくてよかつたよ・・・。

そこで色々すつ飛ばして魔王のところまで行ったわけですよ。ところで何か口調変わつてません俺?

「出でこんかーいーーーこの魔王があーーー」

乱暴に扉を蹴破る。

もうどうちが悪役か分からんよねこれじや。

「どこのやべぢですか貴方は?」

「一緒にいる二つちが恥ずかしいからやめて頂戴・・・。」
それぞれの呆れた声が聞こえるがそんなの関係ねえといった感じで一気にまくし立てる。

「何だあの勇者お断りつて!!俺らはセールスがなんかか!!」
そこまで言つと田の前の椅子に座つてる男・・・こいつが魔王だ。
そいつは面倒そうに隣に立つている女を見て口を開いた。
ちなみにこの姉ちゃん。格好はスーツをびしつと着こなしてて秘書
つて感じの金髪美人だ。

「来ちゃつたよ・・・。」

「あんな貼紙を貼られては逆効果かと・・・。」

「いい手だと思ったのになあ・・・。」

「徹底的に施錠しておけばよかつたのでは?」

「でもさあ…今日は一般開放してるし…。」

道理で途中で戦闘も何もなかつたわけだよ……」ついに何の関心も示さなかつたし。ていうか一般解放つてあんた……。

「一回やられて変身とかしなきゃダメなんだよなあ？」

「統計ではそうですが……。」

「あのネズミのきぐるみとか。」

「各方面に訴えられるかと……。」

「一人羽織で誤魔化すつてのは「セクハラですね。」

間髪いれずバーンと物凄く重い音が響いた。

思わず目を閉じてしまった俺達が次に見た光景は顔から煙を上げる魔王とそいつの顔の形にへこんだフライパンをもつた女だった。

「あのー……。」

思わず俺も声をかけたんだけどさあ……。

「ただ今主がこのような状況ですのでまた今度……ではダメでしょうか？」

こう言われたら頷くしかないよなあオイ……。

「てなわけだ。」

「ていうかこの話続くの？」

「作者の能力次第ですね。ただでさえ文才無いですから。」

とりあえず一行は城をもう一度見上げた後、盛大にため息をつき宿を探すことになった。

「この旅終わるのか？」

「さあ……どうでしょうね……。」

「考えるのも馬鹿馬鹿しいわ……。」

そんなこんなで続く？

続くよね・・・？

続いてよ・・・。

戦隊モノおーじわり

はい、皆さん。閲覧時間に関係なくおはよーいわーこます。

例の「」とく無能な作者によつて登場人物が司会進行を行つことになつてしましました。

ちなみに前回同会進行を行つたレイ君ですが・・・。
まだ寝ています。

ただいまサングラスをした司会者の方がやつてゐるバラエティ番組とか人生相談の生電話をやつてゐる番組とかがやつてそつな時間です。

アイリスですが・・・。

“後は任せたわ”

と書かれた書置きを残してどこかに行つてしましました。探す氣はありませんので悪しからず・・・。

本当にこの人たちやる気が極低温状態に達してますねえ・・・。
まあそんくだらないことはさておき・・・。

「そここの兄ちゃん!! 今日はいいのが取れたんだ!! 買つてかない

かい!!」

「ママー!! こっちこっちー。」

「さあ焼きたてだよおー!!」

「もうちょっと安くなんいかねえ。」

とまあ世間一般の魔界のイメージとは大いにかけ離れた活気に溢れた平和な町ですね。

「ゆるいですね・・・。」

「こまんつい本音が・・・。あ、そこのお嬢さん。ホットドッグ

を一つ下さい。

「やだねえお兄さん。はいよ。100ネイだよ。」

はははは。ありがとうございます。ああちなみに100ネイは100円くらいと思つてください。

ひねりのない作者ですいません。

「お兄さん誰に話しかけてるんだい？」

気にしないで下さいお嬢さん。無能な上司の尻拭いと思つていただければ……。

「苦労してるんだねえ。これはサービスだよ。」

あ、これはありがとうございます。さて……僕だけで城に行つても仕方ないですからねえ……どうしたものでしうか。

・・・（食事中。）

・・・（まだ食事中。）

・・・（食事終了。）

せこい行数稼ぎですね……このダメ作者が……。

ん？何か人だかりが……。あ、ちょっと失礼しますよ。

野次馬とは……我ながらこんなこと……と……で……。

思考停止……。

「プレイブレッド……」

シャキン！

「プレイブブルー……」

キラーン！

「プレイブイローラー……」

キュピーン！

「プレイブグリーン……」

シューイン！

「プレイブブラック……」

キーン！！

「「「「「5人揃つて……」「」「」「」「」

全員が決めポーズ。

「「「「「ブレンジヤー……」「」「」「」

ドーン……（5色の爆煙。）

はつ！すいません思考が停止してしまいました・・・といふとあの色とりどりの爆煙はどうから用意・・・って言つかいつの間に仕込とかやってるんでしそうねえ？

ブルー「いにこるのか？レッド。」

レッド「ああ・・・いに斃すべき相手が！..」

イエロー「あんま気合入れすぎんないでよ。」

グリーン「そのための仲間なのですから。」

ブラック「ふつ・・・。」

レッド「よし！..行くぞ！..」

えーっと・・・以下漢字表記でいくそつです。

あそこでシリアスな空氣を作つているのは良いんですが・・・完全な見世物と化しちゃつてますねえ・・・格好が格好なだけに。

おや？誰かが近づいて・・・あの格好は・・・。

「はいはいどいたどいたー。」

「あなたたちこんな感じ何やつてんの？許可取つたの？」

ああ・・・まあ白黒堂々往来でこんな事やつたらそうなりますよねえ。ていうかそういうとこだけ無駄にリアルなんですね・・・。

赤「我々は勇気戦隊！..」

「「「「「ブレン」」「」「」

「はいはいいいから。話は署で聞くから。」

「とりあえず一緒に来てもらひつよ。」

赤「いや、だから「署で聞くから。」

あ～あ・・・なす術もなく連行されていきました。子供見たらがっかりしますよこれ・・・。ま、いいか。そろそろ戻らないと。そろそろあの勇者も起きてるでしょう。

平和な一日でしたねえ。魔界なのに・・・。

「なあ・・・。」

「はい・・・。」

「暇じやね?」

「忙しいよりは宜しいかど。」

「いや、まあそんなんだけど・・・。一応魔王なんだけどなあ・・・。」

玉座にもたれながらそつ懶く主に対しても内心苦笑しながらそばに佇む秘書だった。

ちなみに“戦隊モノお断り”と書かれた張り紙が追加されたのはこのきつかり2時間後だったとか・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6650c/>

先延ばしのラストバトル

2010年10月11日23時26分発行